

□連載小説／心象風景Ⅰ

# アジサシの海

秋吉 好

え・貝原 六一

真夏の太陽が河口の海に燦々と照りつけていた。アジサシの群が鎌のように鋭い白い翼を煌めかせて飛んでいる。海は細波立ちキラキラと輝いている。アジサシは燕に似た尾羽をびんと張り素早い翼動で風を受けて遊々する。アジサシの姿が白い波間に隠れてしまう。キーツ、キーツ、と鋭く啼いて、アジサシが海に飛び込んでいく。水音が立ち、白い水繁吹きがಾಗる。アジサシが獲物をくわえて舞い上がる。

河口の海は製鉄所と埋立地の間にひろがっている。波止めのテトラポットが幾重にも沈められ鎖のように縁を繋ぐ。埋立地の堤防の下で若い男女が釣をしている。

若者はテトラポットの先に出て竿を大きく振り上げて海に糸を投げ入れる。シャツを脱いで裸になった若者の身体に力がみなぎり、そして一瞬しなやかに弾んだ。筋肉のよく縮った逞しい身体が溢れるばかりに陽光をはじいた。少女は、廂のように大きく反り返って陰になった堤防の側壁にもたれ、編物をしながら、若者の動作を見守っている。クラーとポットと赤いバスケットがならび、若者の脱いだ緑色のTシャツがきちんとたたんである。

対岸の製鉄所は眠った巨大な象のように鎮っている。ときどき白い蒸気の固まりが空に昇って行った。船が沖を音もなく航行する。空には雲もなかった。

赤いクーベが軽やかな爆音をたてながら堤防に沿った

コンクリート道を走ってきた。赤いクーベは堤防の行き止まりに駐車している旧式の白い軽四輪の後ろにブレーキを軋ませてとまった。

清美が車から下り立った。つば広の白い帽子の下黒い髪が風になびく。サングラスをはずして眩しそうに空を見上げた顔は、切れ長の目をした整った顔立ちで、黒水晶の小さな耳飾りがよく似合う。肌は抜けるように白かった。それが白いコスチュームと解け合って、足の指先の紫色のペディキュアまで、照りつける日差しの中で輝いた。

清美は赤茶けた鉄パイプの梯子をのぼって堤防の上にあがった。潮風が顔にぶつかり、帽子が飛びそうになる。清美はそれを両手でおさえた。それでも、風に吹かれて飛んで行きそうになるほど、清美は風を孕んだ。

細波立つ河口の海にアジサシが次から次にダイヴィングを繰り返していた。アジサシが清美の頭上をかすめて夏草が一面に生い繁る埋立地の方へ飛んでいった。

清美は昔から河口の海の自然らしさが好きであった。埋立地は人が造っていないが、それが一番人間から遠くにあるように思われた。生まれたばかりの土地は粗野で人間臭さがなかった。

ただ海の色だけは自然とは違って重く暗く澱んでいた。明るいコバルトブルーの南シナ海、紺碧のインド洋、そして、サバンナの緑の海とは較ぶべくもない。

テトラボットの上で釣をしている若者が清美を見上げていた。清美が若者を見ると、若者は屈託のない笑顔を見た。赤銅色をした半裸体は若く美しかった。しかし、それはやはり黄色人のものであった。黄色人の肌はいくら陽に焼いても深まりがなかった。若者が何か呼びかけたようだが、よく聞こえなかった。

廂になって隠れていた堤防の棚の所から若い女が顔をのぞかせた。鼻がちよっと上を向いた可愛らしい二十才前の幼さだった。少女は清美を警戒して険しい顔でにらみつけた。そしてすぐにまた影の部分に隠れた。

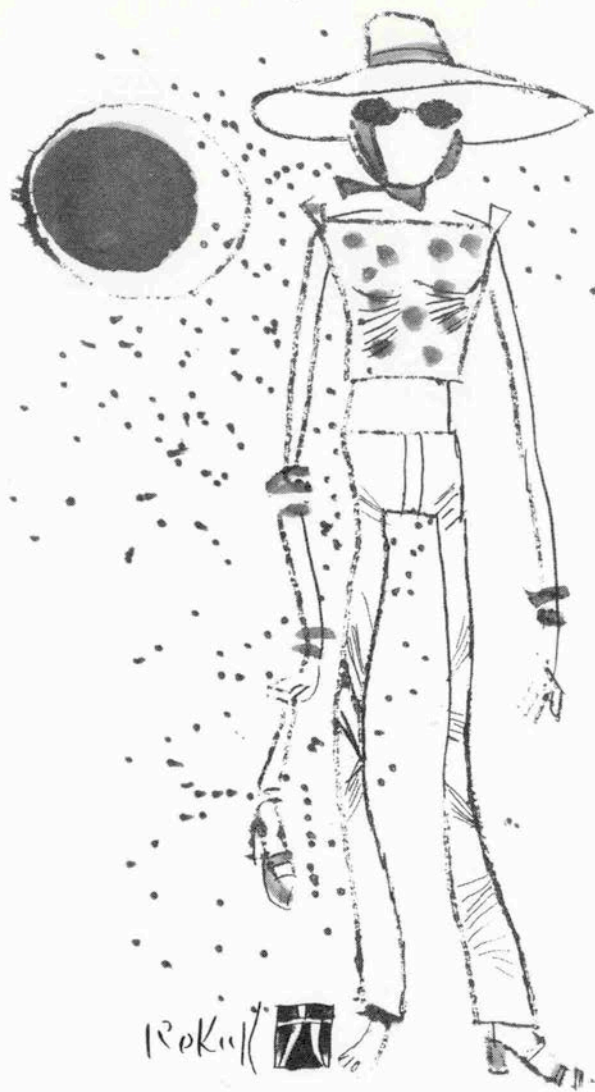
清美は同性から敵意をあびせかけられることには慣れていた。そんなことは自分には無関係だと思っていた。でも、それが三十才を過ぎると、逆に、親しみや優しさや好意をもって接して来られることがあった。清美にはその方が苦痛だった。女性の女性に対するやさしさには

どこか憐みの情が隠されていることがある。それが自分の何に向けられているものか分りすぎるほどに分っていた。

清美は白いサンダルを脱いで堤防の上に腰を下した。身体のおまでじっとりと熱さが伝わってきた。投げ出した足の下から粘っこい海の風が吹き上げてきた。

清美は太陽がいくらギラギラと照りつけても堪えなかったが、湿気が肌にまとわりついていつまでも消えないことにはうんざりだった。これが日本の風土とはいえ、もっと別の透명한太陽の赫きと、乾いた熱い空気につつまれる甘さを知った身体には、大いに苦痛であった。

若者が竿を手繰り寄せた。竿は半月のように撓っている。若者は諸肌脱いだ上半身を折るように前後にそらせながらリールを巻き上げる。テトラボットに打ち寄せる波の間に一筋の糸が滑るようであらわれた。その先に銀



1964年 六

鱗を際立たせた獲物がついていた。若者は得意気に振り向いて笑った。若者の白い歯がまぶしく光った。

川の上流にある空港を飛び立ったジェットが機首をもたげて先の尖った槍のように厚い空気の層を貫いてどこまでも真直に一直線にのぼっていく。

清美は機影がきらめく光に融けて消えてしまうまで窓から空を見上げていた。

「才前ノ国へ行く飛行機カモ知レナイ」

暗闇の中で男が言った。ベッドの上の男の眼が闇の中  
で光っている。

「病院との契約がもうすぐ切れるから国に帰るわ」

「日本カ……。一度行キタカッタナ」

「決して住み易い所ではないわ」

「ケド、日本ノ国ハ日本人ノモノダロウ。ソレデ充分ジヤナイカ」

「そうだけど、好きになれないときがある」

「僕達ニハ自分ノ国ガナイノダ。白人ハ今デモ僕達ヲ支配シテイル。彼等ハ僕達ヲ未開ダトカ、乱レテイルトカ言ツテキタ。実ハ、ソシナコトハ嘘ナンダ。彼等ノ理解ノ範囲ヲ越エテイタダケノコトダ。彼等ノ侵略ヲ正当化スルタメニハ、僕達ガ野蛮デアルコトガ条件ダッタ。ソレガ彼等ノ常套手段ナノダ。僕達ハ乱レテイル。ダカラ、いえすヲ信じ、一夫一婦ノ生活ヲシナサイト教エタ。ケド、ソレモ西洋ノ論理ノ押し付ケデシカナイ。生産力ノ低い部族ノ中デ、女性ガ子供ヲ生ムコトハ重要ナ生産ダッタ。ソレガ女性ノ仕事ダッタ。子供ハ生産力ダシ、女性ノ財産ナノダ。女性ハ子供ヲ持ツコトデ初メテ社会ノ一員トナルコトガデキル」

「私が三十才を過ぎてても子供がないと言ったとき、あな  
たは信じられないと仕切りに頭を振っていたわね」

「ソウダ。僕達ノ社会デハ信ジラレナイコトダ。僕達ノ社会デハ子供ノナイ女性ハイツマデタツテモ幼名ガ消エ  
ナイ。ソレハ一人前デハナイツイウコトダ」

「私が沢山の男性から言い寄られたのも道理ね」

「ソレハ違ウ。才前ニ子供ガナイツイウコトガ理解デキ  
ナカッタノダ。ソレガ僕達ノ論理ナノダ。あふりかニハ  
匂イガアルと言ッタあんそろぼろじすとガイタガ、僕達  
ノさばんなニハ匂イハナイ。さばんなニハさばんなノ論  
理ガアル。呪術ノヨウニ、部族社会ノ中ノ人間ニハ自明  
ノ理デアルコトガ、彼等ニハマルデ理解デキナイ。人間  
ヲ知ルニハ自然ヲ知ラナケレバナラナイ。ソレナノニ今  
ノ文明ハ自然ヲ破壊シテバカリイル。今ニキツト自然ノ  
復讐ヲ受ケルコトニナル」

男は清美の勤務する病院で働いていた。そして、一  
月ほど前、清美が帰国の準備のためにダルエスサラーム  
に滞在していたとき、ザンビアの奥地の戦場で死んだ。  
男が清美に残していったものは、民族愛と、黒く逞し  
い肉体、いつまでも陽に焼けない清美の身体が砕けてし  
まいそうなほど強烈に肉に喰い込んできた熱い進りであ  
った。

——ああ、と、清美は溜息とも悲鳴ともわからない叫び  
をあげた。

白い帽子が蝶のようにひらめきながら落ちていく。堤  
防の斜面をすべり、風に吹き上げられて、舞うようにひ  
らひらと飛んだ。そして、テトラポットの先の海に落ち  
た。

帽子は清美の心から剥れた一塊の想出であった。それ  
が不透明な草色をした海に漂う。

すると、釣をしていた若者が竿を手にしてテトラポッ  
トを順々に渡りながら白い帽子に近付いて行った。

——待っていなよ。とってやるから。

若者はそう清美に言ったようだった。

——ケンジ、やめときなさいよ。

少女の棘々しい声が響いた。

——あぶないわ。

——だいじようぶだ。

少女の甲高い声に対して、若者のくぐもった声は、打  
ち寄せる波の音にも、風の音にも消されてしまう。



清美は白い帽子に寄っていく二人を見ていた。

若者は軽やかにテトラボットの林を越えて清美のすぐ下までやって来た。若者は自分の若さに得意だった。

少女はきこちなくゆっくりと細いコンクリートの棚を歩いてくる。ときどき憎々しげに清美を見上げた。少女は身重らしかった。

若者はテトラボットの先の波間に漂っている白い帽子のそばまで行った。

若者はテトラボットの上の突起に片手をまわし、身体を海の方にのり出した。竿で水面を叩いた。しかし、河口の海は表面は穏やかでも、川の水と海水がぶつかり合って、複雑な流れをつくっている。白い帽子は流れ出しそうに流れずに浮かんでいる。

と、小さく、

あつ、

と、若者が叫んだ。

竿の先に帽子が引つかかったときだった。伸び切った身体がそのままずるずると水の中に落ちて行つた。

ひいっ。

と、少女の悲鳴が重なった。

—— ケンジ、 ケンジ。

少女が気が狂ったように若者の名前を呼んだ。テトラボットの間を不自由な身体で必死になって若者が落ちた所まで行く。

若者はひからびた泥と藻がこびりついたテトラボットの突起の斜面に手をかけて水から這い上がろうとした。



no/kuk



しかし、手掛かりもなく、急な傾斜になっているために、再三ならず上がろうと試みたけれど、ずるずるとすべり落ちるばかりだった。両手の指を大きく広げて斜面を掴むが、幾本もの筋跡が空しく残るだけであった。

若者はすべり落ちるたびごとにいたずらを見つけられ、子供のようににはかんだ笑いを見せた。

少女はようやくテトラポットの間をくぐり抜けて若者のところまでたどり着くことができた。

——あんなのせいよ。あんなも下りて来て助けなさいよ。少女は振り返って清美に毒づいた。

清美は堤防の上に立ち上がっていた。白い帽子が落ちたとき、清美はそれを棄てたと思った。帽子をなくした髪が風になびいて白い服に纏わりつく。清美はすべてを棄てたと思った。

少女が若者の出した竿を握って引き上げる。若者がよろよろと斜面をのぼってきた。少女は渾身の力を込める。若者は笑いながら油ですっかり黒くなった上半裸を水から出し、腰の辺りまで上がって来た。

そのとき、少女の身体がゆっくりとのめ摺り込むように落ちて行った。若者も少女を抱きとめるようにしてそのまま水に落ちて行った。

大きな水音がした。アジサシがぱつと四方に散った。少女は飛び立とうとして水面を蹴って騒いでいるペリカンのように全身をばたばたさせてあばれた。そして、何度か水に沈んだ。若者は少女にしがみつかれて泳ぐうにも泳ぐことが出来ず、二人はからまりながら浮き沈みを繰り返した。

二人は次第にテトラポットから離れて行った。白い帽子は二人の先の水面に浮かんでゆっくりと流れ出した。

二人は最後の力を出してひとしきり激しくもがいていたが、流れに抗することはできずますます沖に流されて、ついには波間に消えてしまった。

清美はだれもいなくなった河口の海を見ていた。だれもいなくなった。白い帽子が遠くの海にかすかに見えて

いたようだったがそれも確かではない。白い大きな燕のようなアジサシが次々とダイビングをした。水繁吹きが対岸のテトラポットの近くや、川の中ほどや、あちらこちらで続いている。二人の男女を呑み込んだ不透明な草色の海は、相変らず細波立ち、陽光がはじけて、絶えずゆらゆらと揺れていた。

清美は堤防から下りた。清美の前から海が消えた。焼けつくコンクリートの白い壁と、まぶしく陽光をみなぎらせている真夏の空として、その空に鎌のように鋭く白いアジサシばかりが舞っている。獲物をとったアジサシが素晴らしいスピードで帆走し埋立地の方へ飛んで行く。太陽は少し西の山の方に傾いた。けれど、依然として、烈しい真夏の陽光が河口の海に降り注ぐ。製鉄所の空に白い水蒸気が昇っていく。

堤防の下に棚に脱ぎっぱなしになった緑色のTシャツとクーラーとポットと蓋を開けたままの赤いバスケットがある。編みかけのピンクのケープと毛糸玉がころがっている。ゴムゾオリがはなればなれに引っくり返ったままになっている。テトラポットの先に釣の道具箱が置いてあり、リンリンと風にゆれて竿の先の鈴が鳴っている。アジサシが遠くで水音を立てた。赤いクーベが低い爆音をのこして堤防沿いの道を走っていく。(第一話完)



秋吉好さんは本年度ブルーメール賞文学部門(小説)の受賞者で寺西郁雄、谷原幸子両氏と共に同人誌「鈍」を舞台に意欲的な作品を発表している。最新号「第11号」では「ミューメックスの変相」という寓意的な作品を発表、またもや新領域への斬り込みを計っている。作品のスタイルが屡々変るところから、いまだ自分のものを掴み切れていないのでは……との批評もあるがそれは秋吉さん自身認めている。今回はオムニバス形式で各回完結で四回連載。こういう試みは以前にもやったことがあるが「とても難しいですね……」が実感。十月号の原稿締切りが「鈍」第12号の締切りと重ったため目下大奮闘中だ。現在、大阪市教委社会教育第一課勤務。東灘区在住。

●北野町の坂道のほとりにある小さなサロン神戸時代。このサロンから新しい時代の波を●



ブーロフラメンコの本格派  
宮田隆さんの帰国初のコンサート



スペイン留学の成果に聞かせる人々(7/28)



神戸時代のママからも花束が贈られて



藤原昭三作品展のオープニングパーティより(8/4)



細川 董 作品展

9 / 1 → 9 / 14

二科に入選し話題を舞った細川先生のユニークな画風をお楽しみ下さい。



羽多悦子 作品展

9 / 16 → 9 / 30

神戸三紀の女流彫刻家羽多悦子さんの空間を、ご鑑賞ください。



湯井一葉

ミニコンサート

9 / 26

PM7:00より



宮田 隆

ブーロフラメンコの宵

9/7 ★ 9/21

PM7:00より

SALON & GALLERY

神戸時代

神戸市生田区中山手通1丁目28  
モンシャートコトブキビル1F  
TEL.078・242・3567

■日曜・祭日休

■営業時間 PM 6 → AM 0 (ギャラリーはPM11:30まで)



連載小説

<4>

# シール・ブラウンの神々

田磨 新

絵・松本 宏



(VII)

「キミの作品を覗いていると、やさしさが出てきたよ」

先輩格の松永が、ウイスキーのグラスを持ったまま、私の絵の前に立ちどまった。白一色の雪景色である。キャンパスの目を残した白の世界は、雪と空の見境もつきにくい。その地平線上に杉林をキャンパスの左右いつばいに細かく描きこんでいた。

松永は、樹氷のようにひかっている防風林の遠景から顔をはなすと私にふりかえった。

「ふーん」

彼は、声にもならない溜息をもらす。私の絵を見入っけていても、別に感動しているわけじゃないのだ。

私は恒例の五人展に雪をテーマにした二〇号の油絵を三点、展示していた。ことしの冬に北陸路の旅をして、仕上げたものである。

この冬の旅に妻を伴い、温泉で雪見酒を愉しみ、知人に紹介された民家の雪下ろしも兼ねたわけだが、妻との仲が決定的な破綻を迎えるというおまけまで付いてしまったのだ。

「器用さがめだつて、テーマが失くなったともいえるね」

松永は、三枚の雪景色を見放す

かのように退ずさりをする。彼のグラスには、液体がなくなり、氷が残っているだけだ。

「この前は静物じゃなかったのか。ランプとか、雁の死骸。その前は港……」

「和歌山の漁港です」

私は松永の記憶を助けるようにいいそえる。

「たしか、昔はピエロも描いていたよね」

私は、両手を前に組み、先生から意見を求められる生徒のように、松永の話に頷く。私のそんな姿勢を注視している眼を背後に感じたが、妻の杉野はまだ、どこにも姿を見せない。

「ところで、奥様はどうしましたか」

私は、彼の話に合わせて再び会場内を見渡した。この絵の制作中に妻とは、別居同然になっていた。その噂を松永も知っている筈だ。しかし、五人展の初日ぐらいは、ちよつと顔をみせにくるかも知れない。私は画廊入口に客が入ってくるたびに注意をはらっていた。

「おそらく、こないでしようね」

「奥様は、焼きものを習いたいとか、いつていたのに、残念だな」

「気が多くて、かないません」

「若いうちだよ、キミ。何をやっても悔いを遺さずに愉しめるのは」

私は、これを機会に松永の側を離れ、若い仲間たちの方へ割りこんでいった。

「船田さん、インドに行くんですか」

ほんとか。いつだ。二年前まで勤めていた広告代理店のデザイナーたちに、私は囲まれる。

「知りあいの坊さんの誘いでね。主に仏跡めぐりだが、行くことに決めたんだ」

ひとりりか。奥様もいっしょか。私は質問に応えず喋ってゆく。

「のっけから欧州やアメリカとかも、おかしなもんでね。まずアジアからだ。日本のどろどろしたものの根源に

接したいと思っていた」

チャンス到来。若いデザイナーの羨しそうな眼が私を見ている。ドストエフスキーに凝った若いころは、ナホトカからイルクーツク。そこからシベリヤ鉄道でヨーロッパ入りの旅を。それともインド洋を船の旅で。夢多き青春のときから、その考えは変わっていない。

「来年の五人展は、インド大陸の風景でわけですか」  
さきほど松永が、テーマがないといっている延長を彼らも見失っているということか。おもしろくないな。と私は口髭をなでながら照れるばかりだ。

仲間や知人たちは、ビールやウイスキーに冷酒の好きなものを飲み、つまみ類を腹におさめると引きあげていった。

「器用になって、なんでも描くが、それだけじゃ駄目なんでね」

松永が、奥のテーブルで若い女性を相手に喋っているのが、聞えてくる。

「対象への切り込みが、甘いんだな」

女は、まじめな顔で松永の話に聞き入っている。

「例えば、この絵の手前の枯ススキ。ワシにいわせれば、こんな情景を描くよりは、雪の風紋を丁寧に仕上げた方が、この画面は生きてくると思うんだがね」

女は雪景色にふりかえては、肩にたれる髪をすくいあげる。

細かい杉木立の遠景に対して、手前に枯ススキが五、六本積雪から首をもたげたまま折れている。私は黒っぽい針のような樹林の遠景も手前の枯ススキも神経質に、同じ熱心さで描きこんでいた。しかし、松永のいう雪の風紋は、私のテーマじゃない。私は、再び松永のテーマに近づいてゆく。

「この絵の本人がやってきましたよ」

松永は、私を女性に紹介した。彼女は、松永に絵を習っている生徒だという。

「雪の怕さや雪の朧大な重量感を知った者には、雪は決



して美しくは描けないんですよ」

私は、若い女性に印象派風に描けないことを説明しはじめて、やめた。

真中の絵に眼を移す。二メートル五〇の積雪に埋まった民家の一軒家。植の防風樹は、母家の二階より高い。納屋や倉に囲まれた四方の庭にも雪は、深く積もっていた。

私の紹介されたその民家には、毎年やってくる雪下ろしの入夫が泊っていた。妻は囲炉裏のそばで、その入夫と冗談をかわしながら、雪の夜をいつまでも喋っていた。昼間も雪が降れば、屋根に上がれないし、積雪がなければ、積もるまで待つしかない。私は、雪のやむのを待ちかね外へ出る。この樹木の城とでもいいたい構図のいちばん気に入った位置を確かめるために、民家の周囲を歩きまわった。私は気に入った地点が、見つかるまで雪の道を駆けていた。母家にふりかえり、入夫が大屋根根に上がっていなければ、不安でたまらなかった。脳裡を掠める怯えが、私の思惑通り、妻の杉野の軀に起った。私は妻の態度で、そのことが判ったが責める気はなかった。むしろ歓迎しているほどだ。老人じみて、惨たらしいといわれようとも、妻がその気なら、私は密かに回春の手段のように考えていた。

夜、ひとつの床で私は妻の乳房に耳を押しつけたまま眠ったふりをしていた。耳のなかを熱い脈搏が鳴り、そのたびに私の頭を少しずつ持ちあげる力を潜めているかのようだった。それは妻の動悸ともちがっている。まぎれもない私の血の流れだ。その脈搏は、直白な雪の世界を、こちらに向けて歩いてくる足音に重なる。深々と降り積もる雪の精なのか。

「飼いきれしと同じだわ。もう我慢できない。打つなら打つて。その方が思いきりがつくわ」

妻は鼻をつまらせたまま、私を詰っている。私が妻の不倫を認めることによって、ある種の拷問をかけていることに気づいていなかった。

私は複数の方が、刺戟があつていいとは、口に出せないまま眠ったふりをつづけていた。あすは、屋根の雪下ろしを手伝うぞ。私はそう決心すると、翌朝、大きなスコップを持って屋根に上がった。入夫は、きびしい顔でふりかえり身をかまえた。

「少し運動をしないとね」

若い入夫の軀からは、すでに汗の湯気がたちのぼっていた。

グレイオブグレイで塗りつぶした白の世界。私には雪は白く見えない。むらさきがかかった蒼い色。冷たい杉野の顔色に似ている。この雪の下に妻の熱い血がよどんでいるのだ。

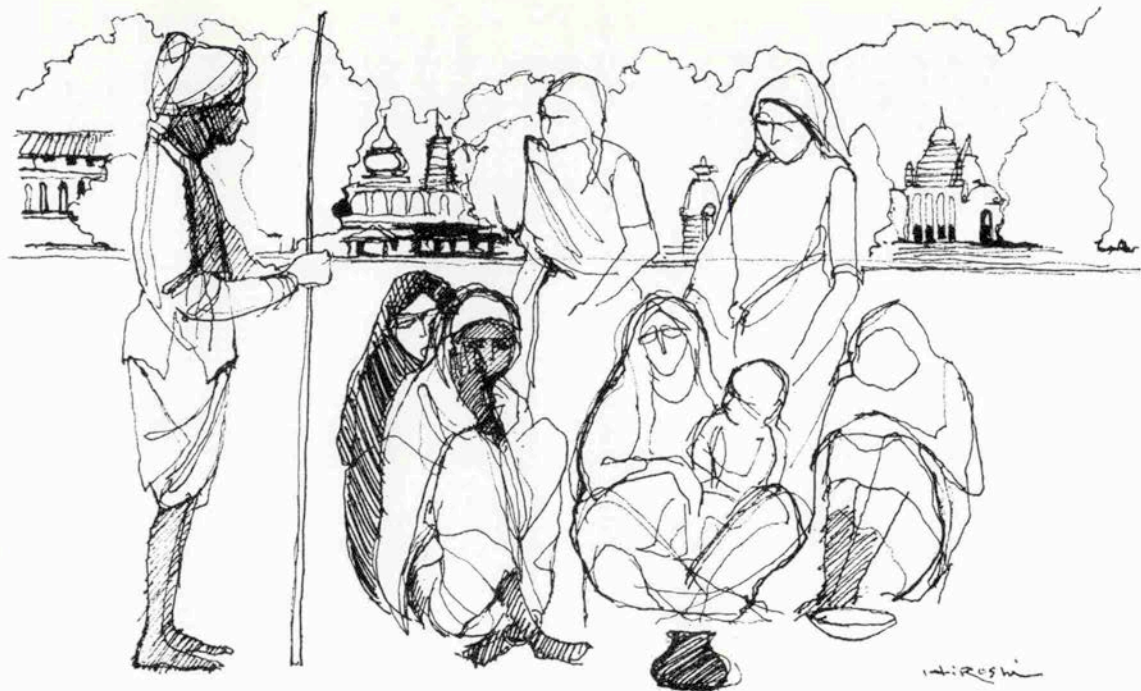
## (Ⅷ)

カルカッタから北部のバトナへは、わずか一時間の空路である。東洋と西洋のごった煮、カルカッタの混沌と昂奮が、まださめやらない。

例えばインド人の肌色を思い出しても褐色から黒びかりの墨色までの色彩番号を色分けしても、とても伝えがたい。早い話が、同じ褐色でも全く明暗や調子が微妙にちがうのだ。音階の音色にも喩えてみたいのだが、それも適切ではなさそうだ。彼らの肌色を気づくままに挙げてみよう。

暗い琥珀色。赤銅色。黒鶯色。水に漏れた革色。雨に漏れた赤錆色。光沢のある黒、鳥の濡羽色。水の底の黒土、褐色。血染になった色に、時間が経って黒ずんできた血痕の色、朱殷。栗の表皮。干ぶどう色。櫟色。紫檀色。マホガニー。駱駝色。獵虎色。蠟色。シール・ブラウン(あざらしの毛皮色)。中年のベニス色……。

ここまで考えをめぐらせると、ふと私は、ガキのころに口ずさんだ謎ときあそびを思い出して吹きだしてしまふ。こんな風に覚えていたのだが。雪は冷たい／冷たいは氷／氷は割れる／割れるは西瓜／西瓜は赤い／赤いは



腰巻／腰巻は臭い／臭いはオソソ……。

思わぬ脱線にしても、彼らの肌色は、インドの神々も言えないだろう。アメリカ・ニグロでもない。アフリカ土人ともちがう。ポリネシアの土着人とも同じでない。ましてインドオとも。

亜大陸と溶けあい膨らんだ闇は、そのまま水が低きに流れるように人々の影をなして、通りにあふれ移動してゆく。それが男ばかり。まさに黒い男根の放列に見えてくるのだ。これらのベニスを受け入れる女たちが、恐らく同じ数だけ建物や路上のものかげに、ひっそりと息をひそめているのだろう。

パトナの夕暮に買物にでた僧侶たちの一行は、町の子供たちや大人たちに何重にもとり囲まれた。

「まるでお故郷入りのスターみたい」

川辺夫人の笑顔がつづかない。トンボ眼鏡をずらせては、しきりに汗を拭う。中央部の舗装道路にまでひろがった人の群れに、二八インチの大型自転車や輪タクが、はばまれるほどだ。

陽やけた背丈のない日本人が、ノッポのG Iたちやパン助とのアベックを乗せ、腰をふりふりペタルをこいでいた風景が、眼の前に重なってくる。そのG Iたちを見あげるように、チョコレートや煙草をねだった兄たちと駆けずりまわった私が、いまパトナの町にきている。

ターバンを巻いた奴、剣をおびたきつい眼の男、五分刈に一房の長い髪を後頭部に残している丸顔など、様々の服装と容貌の男たちが、サドルにまたがったまま、われわれの一行を眺めている。

「チャイニーズ」の声も聞こえる。私は子供たちに聞まれ、英語のスペルを紙片に書きつけて話しかける。少年は十二歳という。私の子供より軀がひとまわり小さい。漆黒の髪、大きな瞳、女の子と見紛うほどのきれいな睫毛。怜悧（れんぎ）そうな顔だちとあいまった軀全体が、いっそう端整に見える。瓜ふたつの弟は、まるで人形のおもかげさえ漂（よ）わせる。

添乗員の野中と私は、間口が一間ほどの店先に陣どつて子供たちと話しこむ。学校で英語を習っているらしく、大人たちよりは話を通じる。笑つても、ほとんど声をたてない。白暫い歯が、朽葉色（くは）の顔に白い花を咲かせる。それが、またなんともいえない清楚な感じなのだが。むしろ歯がない。ネムの粗朶（せだ）で歯を磨くという。われわれが爪楊枝を使うのに似ている。それに子供たちは、汗をかく。水分をできるだけ摂らないようにしているからだ。野中が、説明してくれる。そういえば、大人たちの汗を拭くのをみたが、腰巻の前に垂れた布地で、さつと顔や口を拭う。横着者の私が、シャツの袖でやるのと同じことだが。

私は少年の兄弟にカメラを向けたお礼にと、日本の幼児が胸にぶらさげる交通安全を描いたハンカチーフを余分に持ってきていたから、そつと彼に握らせた。インドの子供にハンカチーフは、いらなかった。

私は、炎暑（えんじよ）とごみこみしたほこりに疲れていた。暑さだけでない、わけの判らない怯えのためにも、とめどもなく汗を流していた。それは、近くのバトナ駅へいよいよ汽車が到着して絶頂に達した。勤め帰りの大人たちの群れが、地面から湧き出るように道路をふさいでゆく。私は群衆にふりかえり、汗を払う。駅舎の向うに、ちょうど大きな夕陽が沈みかけている。私はしばらく燃えおさめの太陽を眺め、眼が眩（くら）ままでいた。その夕陽の手前は、逆光線（さか）になっていて、群衆の暗い蠢（うご）きが、あたかも砂漠に立ちのぼる砂ぼこりを見るおもいだ。日本の大都会のラッシュともちがう。裸像の生なましい雑踏（ざつたつ）の海

が、熱い帯状にひろがり、とぎれることがないのだ。

一見このおぞましい群衆を受け入れる広い亜大陸があつて、熱地のために、何もしくなくても汗で汚れてゆく毎日がある。そんな暮し向きが変りそうもないカーストや宗教が入り乱れていて、貧しさと空腹が、永遠につづくのなら、いったいどんな神々が坐（ま）しますのやら。

—— おお神様。私はふざけているわけでもないのに、考えがまとまらず、茫然と立ちつくしていた。

「子供たちにメロディがないんだね」

夕陽が沈むとあたりに暗さが、ひときわ早く暮れなずんでくる。日本の子供の歌を聞かせていた広告マンは、インドの子供たちの歌声が録音できないことを零（ろ）している。

「よく笑うのだが、まるで声を出さないことにもよるんだね」

「腹がへつていて、歌どころではないということか」

私は、どうしても焼け跡のイメージと結びつけてしまふ。陽が昇れば、頭の上に籠皿（かご）を乗せ、牛糞（うんち）燃料といわれる燃料を集めにでる少年は、その仕事をつづけるだろう。朝のバザールには、歯磨きにもなるネムの粗朶（せだ）を十数本、地面に並べている少年。売れても売れなくても膝をかかえてじつと坐っている子供がいる。

ナールンダやブッダガヤの仏跡めぐりのルートに群つてくる子供たちは、菩提樹の葉脈や白檀の数珠を売りつける。ネパールのヒマラヤ見物に行ったときは、草刈り籠（かご）を背負った少女らが、モデルになったがった。雪をかむったヒマラヤの峰々を背景にカメラにおさまることでワネルピー（ワネルピー）をせがんだ。学校の始業時間までに草刈りするのだという。

「日本人ばかりに物を売りつけるね」

「施しの心が、入りまじるせいじゃないのかな」

「なんぼ、子供たちがうるさくても、いっさいふりむきもしない毛紅（まこう）たちの旅の仕方だけは、やりたくないね」川辺が、日本人の旅の心をいってのけた。（つづく）